

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022

「しなやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第5回 11/17 (木) 13:30～15:00 報告

歴史からみる子ども・若者の多様な困難に向き合った教師・学校

講師 石井 智也 (本学講師)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和4年度第5回公開講座(受講者26名)が11月17日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師である人間関係学部子ども発達学科の石井智也先生は、特別ニーズ教育、特別支援教育を専門とされ、本学では「特別支援教育(幼・小・中・高)」、「発達障害児教育総論」、「重複障害児教育総論」などを学生に教授され、特別支援学校教諭をはじめとした教師・専門職の養成にも携わっておられます。

今回の「歴史からみる子ども・若者の多様な困難に向き合った教師・学校」と題された講演は、2019年に東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科より博士(教育学)学位を授与された学位論文「明治・大正期の東京市における初等教育の成立・普及と「特別な教育的対応・配慮」に関する歴史的研究」に基づくものであり、先生が長年研究を重ねてこられた分野を、私たちにもわかりやすくお話を下さいました。

講座では最初に、学制は、明治5年に全国に公布された近代的学校制度を定めた法規で、この実施により、全国にまず初等教育機関である小学校が設置されていったこと、そして、小学校令により教育課程や教育内容などを定める各種規則が制定され、市町村の学校設置義務、保護者による児童への就学義務、授業料の非徴収に象徴される国家による就学保障が促進され、就学率も明治33年には90%を超えたことが説明されました。

しかし、そうした中で地方を見ると、拒否や忌避をしていた事実があったということです。その理由として、急激な資本主義化により国民の生活が悪化した状況もあり、子どもの貧困、疾病・感染症、児童労働などにより、不就学の問題があったそうです。

これらをまず、都市スラム化が起こった東京市に着目して、学校や教師がどのように向き合っていたのかを多数の貴重な写真を通して説明されました。放置された子どもに対しては、授業料無償や学用品の給貸与をすることで、就学と学習のニーズに応えていきました。また、学校や教師は、不衛生で劣悪な環境による深刻な健康問題にも対処し、理髪、入浴などにまで取り組み、生存と発達を守る機能としての役割も果たしていたそうです。

次に私たちの身近な地域として、明治期の岐阜県における状況と学校や教師の取り組みを挙げられ、濃尾震災による被害や教育復興、山間地農村の子どもの生活実態、労働児童、多様な学習困難児などへの教育的対応などを紹介されました。

そして、現代社会にも、子どもの貧困化や教育格差の拡大、コロナ禍での多くの問題や課題もあることから、子どもを守るためにも、学校や教師の意義や役割が問われ始めているこ

とを話され、歴史から学んでいくことも大切ではないだろうか、と問いかけをなされました。

岐阜地域の当時の様子や小学校の写真もあり、取り組まれた地域の人物なども多数紹介を下さり、身近な地域が題材でより興味深く学ぶことができ、受講生の方々は熱心にメモを取り、真剣な眼差しで聞き入られていました。

受講後の質疑応答では、「就学における『学』の意味について」「教師の質や制度について」「教師の働き方について」「明治教育の中心者について」など、多数の質問や教師に対する感謝などが話されました。その問いに対して石井先生は、私たちにも理解しやすいように、レジュメを確認しながら一つ一つに丁寧に解説を下さいました。国や地方自治体の取り組みとともに、我々地域の大人や教師が「どのように子どもに向き合うか」「向き合えるか」をあらためて考えることのできる質疑応答となりました。

講座後も、受講生の方々が笑顔で先生を囲んでいらっしゃる姿を見て、今回の講座内容に対する地域の方々の子どもに対する熱い思いと研究職の熱い思いが伝わってくる貴重な時間を感じ、現代の子どもに関する問題を共に考え、共に育てていくといった、「しなやかに生きる」考え方を身につける一助となった講座でした。

【講座の様子】

